

Title	The Good Soldierを読む : Leonora Ashburnhamの戦い
Sub Title	A reading on The Good Soldier: Battles fought by Leonora Ashburnham
Author	河内, 恵子(Kawachi, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.202(187)- 220(169)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0220

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Good Soldier を読む

—Leonora Ashburnham の戦い—

河内 恵子

I had never really tried to put into any novel of mine *all* that I know about writing. I had written rather desultorily a number of books—a great number—but they had all been in the nature of pastiches, of pieces of rather precious writing, or of *tours de force*. But I have always been mad about writing—about the way writing should be done and partly alone, partly with the companionship of Conrad, I had even at that date made exhaustive studies into how words should be handled and novels constructed.

So, on the day I was forty I sat down to show what I could do—and *The Good Soldier* resulted.⁽¹⁾

Stella Bowen への dedicatory letter の中で Ford 自身が述べているように、*The Good Soldier* は、書くことに取り憑かれたひとりの作家が自らが持てる全ての技と力とを注ぎ込んで創り上げた小説作品である。1913年12月17日にこの作品は書き始められた。作家は40歳。この時までには作家は如何にしてその技と力とを培ってきたのであろうか。

Ford Hermann Hueffer は、1873年12月17日、Surrey 州 Menton に⁽²⁾生まれた。ドイツ人である父、Dr. Franz Hüffer (Francis Hueffer) は著名な音楽評論家であり、the *London Times* の音楽批評欄をその活躍の場としていた。母、Catherine Madox Brown はラファエロ前派の画家、Ford Madox Brown の娘であった。この母の異母姉 Lucy は Wil-

liam Michael Rossetti の妻となっていたので、Dante Gabriel Rossetti, Christina Rossetti は Ford の叔父、叔母ということになる。父の家もそうであったが、父の死後移り住んだ祖父 Ford Madox Brown の住居もまた、さまざまな芸術家や文人たちが頻繁に訪れる芸術文化のサロンといった趣をもっていた。

1889年に死別した父よりもこの祖父を Ford は愛していた。祖父は父のように ‘the patient but extremely stupid donkey’ と Ford を形容することは決してなかった。いやむしろ、祖父にとって Ford は ‘genius’ だったのだ。もう少し正確に言うならば、Ford Madox Brown の孫は天才でなければならなかったのである。“My grandfather had to have geniuses for his grandchildren.” そして彼は天才となるべく訓練された。

祖父の援助の下で、子供向けの fairy tale, *The Brown Owl* を1891年に出版し、ここに Ford Madox Ford の作家活動が始まる。また、この年に Ford は Roman Catholicism へと改宗する。翌年、最初の長編小説 *The Shifting of Fire* を出版する。1893年に祖父が亡くなり、その後 Ford は一個の独立した人間として文学の世界にのめり込んでゆく。

Elsie Martindale (Ford が学んだ Praetoria House の同級生) との駆落結婚という形で家を離れたのは Ford は祖父の伝記を書くという行為を通して祖父に依存していた過去の自分と別れを告げ、と同時にひとりの職業作家としての出発を世に宣言する⁽³⁾。

Edward Garnett の仲介によって Joseph Conrad という知己を得たのが1898年のことであり、それ以降10年間にわたって二人の協力関係が続く。*The Inheritors* (1901), *Romance* (1903), *The Nature of a Crime* (1909 in the *English Review*; 1924) という共著が発表された。二人の関わり合いの中で生まれたさまざまな確執や誤解については、多くの研究者が言及しているばかりか、Conrad 自身やその妻も書き留めてはいるが、Ford 自身は二人の作家の協力関係を肯定的に捉え、Conrad との「10,000回の会話」を通して多くを学んだと率直に認めている⁽⁴⁾。フランス小説、特に、フロベール、モーパッサン、ツルゲーネフの作品に小説の理

(170)

想の形を見た二人は、それぞれに、小説という文学ジャンルの面白さ、印象主義的手法、的確な表現手段としての言葉の重要性といったことを、自らが書くという行為の中で体得していった⁽⁵⁾。

Conrad との共同作業と並行して、Ford は、多岐のジャンルにわたってさまざまな作品を発表した。特に注目すべき作品は、1906年から1908年にかけて出版された“Katharine Howard”三部作 (*The Fifth Queen, Privy Seal, The Fifth Queen Crowned*) であろう。歴史上の人物と事件を題材にしたフィクションを構築することによって、Ford は自らが生きてきた時間を強く意識した。ありとあらゆる事象を呑み込んで流れゆく時間のとてつもなく大きな力を認識し、自分自身をも含めて、全ての人間を生きしめる背景としての歴史に深い興味を抱いた。これ以降の Ford の小説において、時間や歴史が作品の中心課題のひとつとして詳細に描かれるようになる。

1908年から1909年にかけて、Ford Madox Ford は the *English Review* の編集に携わる。“the best literary journal issued in England in this century” と評されるこの雑誌は確かに当時の文学の鼓動を伝えている。⁽⁶⁾ Thomas Hardy, Henry James, Tolstoy, Conrad, Yeats, H. G. Wells, Pound, Wyndham Lewis, W. H. Hudson 等が投稿していた。D. H. Lawrence の短編 “The Odour of Chrysanthemums” が、初めて発表されたのも the *English Review* においてであった。編集者 Ford はこの短編小説の冒頭の一段落を読んだだけで、雑誌掲載を許可した。Ford の読み手としての力を示す有名なエピソードである。⁽⁷⁾

文人として実りの多い時を生きていた Ford ではあったが、その私生活は波瀾の兆を見せ始めていた。女流作家、Violet Hunt と知り合った Ford は Elsie との離婚を決意する。しかし、離婚裁判は暗礁に乗り上げ、the *English Review* 廃刊後の負債は大きく、彼は窮地へと追い込まれる。だが、書くことだけは放棄しなかった。1910年前後のこの苦しい時期から、*The Good Soldier* が発表される1915年までに、Ford は16冊の本を出版した。幼ない二人の娘との別れ、破産、世間や友人の非難という冷酷な現

実の中で、Ford Madox Ford は書き続けた。Conrad との共同作業や歴史小説執筆、そして、雑誌編集というさまざまな場面で体得してきた技と、心の病、妻子との別れ、財政難といった辛苦を生き抜いてきた力とを駆使して書き続けていた。外からも内からも強い負の力が Ford を押し続けていた。この負の力に勝つ為には、徒に抵抗を示すのではなく、自らの内にその負の力を取り込んでしまい、書くという行為によってその力を正へと変化させねばならなかった。*The "Half Moon"* (1909), *A Call* (1910), *The Simple Life Limited* (1911), *The New Humpty-Dumpty* (1912), *The Young Lovell* (1913) 等と Ford の果敢な創作活動は絶え間なく続き、1915年に、この間の体験と実験の総決算として *The Good Soldier* が創作された。自らを“mad about writing”と称した Ford が、まさしく狂ったように書き続けた結果得られた勝利であった。

The Good Soldier は巧妙に書かれた小説である。それゆえに、数多くの研究者たちが、実にさまざまな面からこの作品を論じてきた。Ford Madox Ford 自身の人生と作品とを密接に関連付けて研究することによって、作者の内面とその生きた時代を浮き彫りにしようとする研究者もいれば、小説の中に在る対立概念 (e. g. カソリシズム対プロテスタンティズム、イギリス対アメリカ、見せかけ対現実, etc.) を中心に作品を分析する者もいる。作品が tragedy か comedy かと問う人もいれば、Freud の先駆者的存在としての Ford に注目し、*The Good Soldier* を心理小説として考察している研究者もいる。⁽⁸⁾ また、第一次世界大戦参戦前後のイギリスの、ひいてはヨーロッパの焦燥の時間をテーマとして読んでいくことも可能であろう。しかし、あらゆる研究者と読者とを一様に魅了するのは、作品の語りがもつ、あるいは語り手 Dowell 自身がもつ不可解な力であろう。Dowell の語りは混沌としている。悲劇的な事件の目撃者である、いや当事者の一人といった方が正確かもしれないが、語り手は事件の全容を聞き手 (=読者) に伝えようと必死に努力を重ねるが、聞き手の方は、語り手の未熟な語りに——事件のあらましが時間的順序に従って報告されな

(172)

い、思い出話に脱線してしまう、客観的な事実を述べながらも主観的な意見をついつい挿んでしまう——苛立つ気持を抑えきれなくなる。しかし、どうしても事の真相が知りたい聞き手は忍耐に忍耐を重ねて、Dowell の話に耳を傾ける。未熟ゆえに無情な語り手 Dowell に「早く続けて、それから？」と問い質したくなる時、聞き手（＝読者）はこの秀抜な語りを創り出した Ford Madox Ford の技と力との大きさに気付き思わず苦笑してしまう。Dowell の語りの技を詳細に分析するのは確かに興味深い仕事ではあるが、本論文においては、論者は、Dowell の語りを通して私たち聞き手に伝えられた複数の人物の中から Leonora Ashburnham を選び、彼女と関わり合うことによって破滅へと導かれる人間たちを見つめ（この中には語り手 Dowell 自身も含まれる）、その過程の中でこの小説作品が内包する大きな悲劇の核心部分を考察してゆきたい。何故、Leonora Ashburnham に注目するのか。ひとつには、彼女を中心に *The Good Soldier* を論じた評論が存在していないということ。そしてもうひとつには、こちらの理由の方が重要なのだが、Dowell の語りを注意深く聞き終わった後でも（＝作品を細かく読んでも）、Leonora という人間が依然として不可解なままであるということである。未熟な語り手にはたとえ言葉を尽くしても語りきれない存在なのか。語り手自身が理解することができない女なのか。Ford は彼女を創り出すことによって何を描こうとしているのか。

Dowell は始める。

This is the saddest story I have ever heard.⁽⁹⁾

Leonora Ashburnham の戦い

Leonora Powys が修道院での教育を終えて家に戻ってきたのは19歳の時であった。裕福とは言い難いアイルランドの地主の娘であった彼女は父の友人の息子である Edward Ashburnham と結婚することになる。Edward は七人姉妹の中から Leonora を選んだのだった。

He (=Edward) had the very great admiration. He admired her (=Leonora) for her *truthfulness*, for her *cleanness of mind*, and the *cleanrun-ness of her limbs*, for her efficiency, for the fairness of her skin, for the gold of her hair, for her religion, for her sense of duty. It was a satisfaction to take her about with him.⁽¹⁰⁾
(Emphasis added)

誠実で、心も身体も潔癖さを表わしている Leonora に Edward は魅かれた。Edward はというとき当時22歳で、軍人になる為の教育を Sandhurst で受けた後、軍人として、領主として、地方の政治家として一人前になるよう努力を重ねていた。また彼は文学を愛する青年でもあり、スコットの小説やフロワサールの年代記を読んでいた。若く、それゆえに ‘innocent’ で ‘ignorant’ な二人の出会いであった。

...at the time of his marriage and for perhaps a couple of years after, he did not really know how children are produced. Neither did Leonora.⁽¹¹⁾

しかし、二人の愛は徐々に深まり、幸福な結婚生活が続くかと思われた。ところが、父の亡き後 Branshaw Teleragh の主となった Edward と妻 Leonora との間に微妙なすれ違いが起きるようになる。Leonora が23歳頃のことである。夫のあまりにも寛大なお金の使い方不安を感じ始めた彼女は、可能な限り節約しようと心掛けるようになる。領主として出来る限りのことを領民の為に行ない、領民も可能な限り領主に尽くすという伝統的な ‘feudal theory of an over-lord’ の思想を掲げる Edward とアイルランドの小地主の娘として生まれ、節約を美徳として生きてきた Leonora との間に考え方の相違が生じるのは当然である。しかし、問題はこれだけではなかった。

子供が生まれたならば、男子は Anglican として、女子は Catholic として育てるとというのが Edward の揺ぎない方針であったが、熱心な Ca-
(174)

tholic 信者である Leonora にとってはこれは承服しがたい考え方であった。恐ろしい考え方であった。

Leonora was in an agony during all this time. You will have to remember she seriously believed that children who might be born to her went in danger, if not absolutely of damnation, at any rate of receiving false doctrine.⁽¹²⁾

しかし、二人の間に子供が生まれることはなかった。これは神の意図するところだったかもしれない。

土地や屋敷の管理方法ばかりではなく、昔からの使用人や領民との関係のあり方までにも介入してくる Leonora を Edward は疎ましく思うようになる。“He seemed to regard her as being not only physically and mentally cold, but even as being actually wicked and and mean.” (138) Leonora としては、熱愛する (“loved passionately”) 夫を、将来訪れるかもしれない財政的危機から守りたいと願っていたのだが、結果として夫を支配しようとするようになってしまい、彼女自身途方に暮れてしまう。そればかりではなく、子供が生まれないことを悩み、もし生まれたとしても、その子供の宗教はどうしたらよいのかと苦しみ、Leonora は自らも気付かないうちに “cold” な女になってゆく。そして、結局は、「理想的な領主の妻」を求めている Edward の眼には、“mean” で “wicked” な妻と映ってしまう。

このような時に Kilsyte 事件が起こる。列車の中で向かい側の席に坐った愛らしい子守り女が泣いているのを見た Edward は、女を慰めようとして彼女を抱きしめ口づけしてしまう。驚いた子守り女が事を公けにした為に、Edward は、上流階級の紳士が下層階級の女を誘惑したという罪に問われ、審問を受けることになる。この事件は Edward と Leonora にとっては “a relief” のように思われる。夫と妻との間でますますその度合いが強まっていた緊張関係がこの事件を切掛に弛緩する。Leonora は終

始夫を弁護し、理想の妻として夫を理解し夫に忠実であろうと努める。だが、Edward Ashburnham がこの事件を通して学んだものを、Leonora は知り得なかった。Leonora を裏切ることなど出来る筈がないと信じ込んでいた Edward であったが、この事件を契機に、彼は、妻以外の女を自分は愛しうるのだと認識するようになる。And from that moment, that girl appeared desirable to him—and Leonora completely unattractive. (145)

夫を世間の非難から守ろうと必死に戦う Leonora を見て、Edward は彼女に対して深い尊敬の念と感謝の気持を抱くが、それゆえにかえって自らの心に近い問題に対して、すなわち領主としての責任や軍人としての心構えや伝統意識に対して妻がますます“cold”になっていくように感じ始める。

It brought his despair of her up to a point of exasperation—and it riveted on him the idea that he might find some other woman who would give him the *moral support* that he needed. *He wanted to be looked upon as a sort of Lohengrin.* (Emphasis added)⁽¹³⁾

ここに Edward の旅が始まる。騎士たらんとする自らを精神的に支えてくれる女を求める旅が始まる。Leonora はその戦いを開始する。Edward がその身分に不相応な恋をして窮地に追い込まれたりすることがないように、社会的地位や名誉を傷つけられることがないように、彼女は夫を見守り始める。見守ることによって彼の愛をもう一度自分のものにしたいと願いつつ Leonora は戦いを始める。いや、もう既に彼女は戦い始めている。

事件が片付いた後、夫婦は心身の休息の為 Monte Carlo へ赴く。この地で Edward は the Gand Duke の愛人である La Dolciquita に恋をするが彼女には棄てられ、糶てて加えて大金を巻き上げられてしまう。Edward は自暴自棄になって賭事に没頭し、財産の大部分を失ってし
(176)

まう。夫の行状に気付くのが遅れたことを悔やむ間も惜しいかのように Leonora は善後策を講じる。Ashburnham の家に伝わる Vandyke の絵画や銀食器を売却し、Branshaw Teleragh を七年間に亘って年間千ポンドで貸すことを取り決める。先祖代々の財産を失って Edward は涙を流し、Branshaw を賃貸することにいたっては身体が汚されるような思いを禁じえない。

二人は英国を後にして生活費の安いインドへと旅立って行く。Captain Ashburnham として赴任した Edward は部下の妻 Mrs Basil と恋におちる。抑制力が働いている静かな恋を Leonora は黙認する。八年の歳月が過ぎ去り、借金も返し終え、一ヶ月後には Branshaw へ戻るという時、Edward は自らの内の新しい恋心に気付く。若い部下の妻 Mrs Maisie Maiden に対する熱い思いを断ち切れなくなってしまっていたのだ。心臓を病んでいるとはいえ、Maisie は美しく、明るく、心優しい女性だった。Leonora は彼女が好きだったし、Maisie もまた同じ修道院で学んだ先輩ということもあって Leonora を敬愛していた。激しい恋心に突き動かされて Edward は “I say, couldn't we take Mrs Maidan with us to Europe and drop her at Nauheim?” (159) と思わず Leonora に尋ねてしまう。後者は静かに答える。“Yes. I promised it to Charlie Maidan this afternoon. I have offered to pay her ex's myself.” (160) Edward を見守ってきた Leonora は、彼を満足させる為に、辛い恋心から彼を解放する為に、Maisie を Europe に連れて行くことに同意する。Maisie に飽きた時、必ずや Edward は自分の許へ戻ってくると Leonora は信じていたのである。

節約に節約を重ねて借金を返済し、故郷を遠く離れた土地で自らを支え続けてきた Leonora に Edward は少しずつ心を寄せるようになっていた。Monte Carlo の事件以来、肉体関係のない夫婦ではあったが、今ようやく、二人は近づきつつあったのだ。Maisie Maiden に対する恋心が燃焼し尽くした時、Edward は Leonora を愛するようになる筈だ。

And Leonora imagined that when poor Maisie was cured of her heart and Edward had seen enough of her, he would return to her. She had the vague, passionate idea that, *when Edward had exhausted a number of other types of women he must turn to her*. Why should not her type have its turn in his heart? She imagined that, by now, she understood him better, that she understood better his vanities and that, *by making him happier, she could arouse his love.*⁽¹⁴⁾ (Emphasis added)

Leonora のこの夢を無惨に打ち破るのは一体誰なのか。

Edward と Maisie と共に Leonora はヨーロッパに帰ってくる。Branshaw Teleragh の女主人として凱旋する。

心臓病を患う人の為の保養地 Nauheim へと戦いの舞台は移る。

Captain and Mrs Ashburnham が語り手、Dowell とその妻 Florence に出会うのはこの保養地においてである。語り手は記録している。Edward はこの時33歳、Leonora は31歳、Florence は30歳、そして語り手自身は36歳であったと。裕福なアメリカ人夫婦は英国の county family を代表するかのような Edward と Leonora に惹かれ、二組の夫婦はこの後9年半もの年月の間、一年のうち2ヶ月は Nauheim で過ごすという約束を基準にして親しく交際してゆく。語り手の目に Leonora は “too good to be true” に見え、Edward は “the cleanest looking sort of chap; —an excellent magistrate a first rate soldier, one of the best landlords, so they said, in Hampshire, England” (18) と映る。二人の過去を語り手は知る由もない。自らの妻の過去についても現在についても無知である Dowell に Edward と Leonora の秘めた生活を憶測することなど出来はしない。しかも、Dowell の知らないうちに Leonora と Florence との戦いは始められ、彼が何も気付かないうちにその戦いは終わってしまうのである。全てが終わった後で主に Leonora から聞かされた事実を Dowell が記録しているという体裁をこの小説はとっているが、あらゆる事情を知っていた Leonora を真の語り手と考えることも可能である。

自らが戦った戦いを Dowell に語る Leonora を小説の軸にしてこの作品世界を考察することは十分に可能である。

Leonora と Florence との戦いを見てみよう。Nauheim に自分を連れて来た Leonora の真の目的が、自分自身を Edward の“adulteress”に仕立てることにあったと考え、且つまた、Edward が Florence に心を動かしつつあるのを察知した Maisie Maiden は夫の許へ帰ろうと大急ぎで旅仕度をしている際に心臓発作を起こして亡くなってしまう。Florence が Edward を誘惑しようとしていることに Leonora が気付いたその日、1904年8月4日のことであった。Maisie の死後一週間ほどして Florence は Edward の愛人となるが、この関係は Florence が亡くなる1913年8月4日まで続く。

Florence は8月4日に縁がある女である。生まれたのも8月4日(1873年)、叔父と恋人 Jimmy と共に世界一周旅行に出たのも(1899年)、語り手と結婚したのも全て8月4日である(1911年)。当然のことながら Ford Madox Ford はイギリスがドイツに宣戦布告した1913年8月4日を意識してこの日付を不吉な戦いの、平和を乱すものの象徴として用いている。Florence は Leonora に不吉な戦いを挑んだのである。Maisie Maiden に倦きたら Edward は戻って来てくれると信じていた Leonora の祈りにも似た思いを Florence は残酷に毀してしまったのだ。

Florence は Dowell と結婚する以前に Jimmy という恋人と付き合っていたが、結婚後もその関係を続けていた。夫を寄せ付けない為に心臓が悪いという嘘を作り上げ、毎年、保養地にまでやって来ていたのである。Florence の夢は、先祖が住んでいた英国の county に屋敷を求め、その女主人となることであった。しかし、皮肉なことに、「心臓が悪い」という自らが作り出した嘘の為に船旅は禁止され、憧れの地イギリスにも行けなければ、故郷のアメリカにも帰れないというジレンマに彼女は陥っていた。

Florence が Edward の愛人となってからの Leonora の戦いは、それまで Leonora が Edward を守る為に戦ってきた戦いと大きく異なってい

た。今まで、Leonoraが自らの武器としていたのは抑制と沈黙であった。

She had been drilled—in her tradition, in her upbringing—to keep her mouth shut. But there were times, she said, when she was so near yielding to the temptation of speaking that afterwards she shuddered to think of those times. You must postulate that what she desired above all things was to keep a shut mouth to the world, to Edward and to the women that he loved.⁽¹⁵⁾

Leonora はこれまで気高く自らを抑制して生きてきた。しかし、“vulgar” で “common flirt” でしかも “unstoppable talker” である Florence を相手にして Leonora は抑制と沈黙という武器を棄ててしまう。Edward を取り戻すという大きな望みを断たれた Leonora は全ての支えを失ったかのように感じる。

You are to remember that the main passion of her life was to get Edward back; she had never, till that moment, despaired of getting him back. That may seem ignoble; but you have also to remember that her getting him back represented to her not only a victory for herself. It would, as it appeared to her, have been a victory for all wives and a victory for her Church.⁽¹⁶⁾

抑制と沈黙という武器を失った Leonora は、話し始める。Florence と戦う為に、Florence を通して Edward に語りかける為に Leonora は話す。Leonora と Edward との仲を取り持ちたいと言い寄ってくる厚顔無恥な敵と戦う為に Leonora は沈黙ではなく激しい言葉を選んだ。“You come to me straight out of his bed to tell me that that is my proper place. I know it, thank you.” (70) “I should think myself defiled if Edward touched me now that he has touched you.” (176)

果てしなく続くかと思われた二人の戦いに終止符を打ったのは Florence-
(180)

ce の服毒自殺であった。1913年8月4日、Florence は Edward が新しい恋に心を焦していることを知る。そして、その直後自らの過去 (Jimmy との関係) を知るアメリカ人が保養地にやって来て、偶然、夫、Dowell と共にいるところを見て大きな衝撃を受ける。Edward の愛ばかりか夫の信頼と尊敬をも失うことになると咄嗟に判断した Florence は自らの命を断ってしまう。

Leonora の戦いはここで終わったわけではない。新しい恋に苦しむ Edward を救わなければならないのだ。

Nancy Rufford は Leonora と Edward が保護者となって育ててきた女性である。13歳の時に両親が離別して以来8年間、Nancy は Edward と Leonora を心から愛してきた。

For Nancy's love for Leonora was an admiration that is awakened in Catholics by their feeling for the Virgin Mary and for various of the saints. It is too little to say that the girl would have laid her life at Leonora's feet. Well, she laid there the offer of her virtue—and her reason.⁽¹⁷⁾

Edward was always right in his determinations. He was the Cid; he was Lohengin; he was the Chevalier Bayard.⁽¹⁸⁾

二人への愛に苦しみながらも、Nancy は一人の男としての Edward に惹かれている自分自身を発見する。“Lohengrin” にならんとしていた Edward は自らを伝説上の騎士のように愛してくれる Nancy にはんものの恋心を抱く。このような二人を目前にして Leonora は激しく苦しむ。

At that moment Leonora hated Edward with a hatred that was like hell, and she would have liked to bring her riding-whip down across the girl's face. What right had Nancy to be young and

slendar and dark, and gay at times, at times mournful? What right had she to be exactly the woman to make Leonora's husband happy? For Leonora knew that Nancy would have made Edward happy.⁽¹⁹⁾

生まれて始めて体験したほんものの恋に苦しみ続ける Edward は “convention” と “tradition” に従って行動することを決意し、Nancy を彼女の父の許、インドへと旅立せるように手配する。Nancy としては、突然手紙を寄こした母の許、グラスゴーへ行き、落ちぶれている様子の母を助けようと決意する。Leonora はそのような二人の逃避を許そうとしない。彼女は Nancy に Edward の許に残り、彼を救ってくれるようにと説得し続ける。「貴女には Edward を愛させた罪がある。償わなければいけない。彼の愛人になることによって愛させた罪を償うべきだわ」 Leonora は話し続ける。Florence との戦いを通して得た新しい武器、話すという武器を振りかざして Leonora は戦い続ける。かつての Leonora と同様に沈黙を守る Nancy を強迫するかのように彼女は話し続ける。ある夜、Branshaw Teleragh を覆う愛と憎しみの緊張に屈したかのように、Nancy は Leonora の腕の中に飛び込み、二人の女は激しく泣く。ひとつのベッドに横たわって、二人は話し続ける。毎晩、毎晩、話し続ける。Edward は二人の女の話に攻撃される。

Night after night he would hear them talking; talking; mad-dened, sweating, seeking oblivion in drink, he would lie there and hear the voices going on and on. And day after day Leonora would come to him and would announce the results of their deliberations.⁽²⁰⁾

Leonora も Nancy も狂い始めているのだろうか。攻撃され傷つけられる Edward に残された道は狂気か。あるいは死か。二人の女は Edward を苦しめ続ける。Leonora はもはや彼女には救い出すことのできない愛

(182)

の世界の中に陥った Edward を苦しめることによって、自らが求め、しかし、叶えられなかった夢を浄化させようとしている。Edward の愛を取り戻したいという祈りにも似た強い希求が絶たれた Leonora には、言葉によって、その抑圧された沈黙の過去を解放する必要があったのだ。

「あなたは何がほしいの？ どうしたいの？」と問い続ける Leonora に「言ったはずだ。ナンシーをインドへ、彼女の父の許へやるだけだ」と答え続けた Edward であるが、繰り返される同じ質問に思わず「5000マイル離れていてもナンシーが愛し続けてくれるなら、僕はちゃんとやっていける」と答えてしまう。この言葉を聞いた時、Leonora は最後の攻撃を Edward にしかけることを決意する。

Nancy に Edward の過去の女性関係を具に語った後、Leonora は自分自身は離婚するので Nancy こそが彼のものに、“violent, overbearing, vain, drunken, arrogant, and monstrously a prey to his sexual necessities” な Edward のものになるべきだと主張する。‘You must save Edward’s life; you must save his life. All that he needs is a little period of satisfaction from you. Then he will tire of you as he has of the others, But you must save his life.’ (217)

Leonora の言葉を受けて Nancy は Edward の部屋に行く。

‘I am ready to belong to you—to save your life.’ ... ‘I can never love you now I know the kind of man you are. I will belong to you to save your life. But I can never love you.’⁽²¹⁾

残酷な言葉である。Nancy には残酷で冷淡な面が確かにあった。

I (=the narrator) dare say that the miserable nature of her (=Nancy) childhood, coming before the mixture of saturnalia and discipline that was her convent life, added something to her queernesses.⁽²²⁾

For there was about Nancy a touch of cruelty—a touch of definite actual cruelty that made her desire to see people suffer. Yes, she desired to see Edward suffer. And, by God, she gave him hell.⁽²³⁾

Leonora から伝授された言葉という武器でその残酷な性質を強固なものにした Nancy は徹底的に Edward を攻撃する。

‘Go back to your room....This is all nonsense.’ (224) Edward の言葉には悲痛な思いが込められている。

Florence の死後、アメリカに渡っていた Dowell は Edward と Leonora に乞われて Branshaw Teleragh を訪れる。Dowell は Nancy を愛していたので、出来れば結婚したいと願っていた。しかし、Leonora はしばらくは Nancy をインドに置いておきたい旨を示す。

Dowell を相手に Edward は話し続ける。‘I am so desperately in love with Nancy Rufford that I am dying of it.’ (224) Dowell の気持を慮る心の余裕もなく Edward は語り続ける。言葉を発することによって、言葉を聞くという地獄から自らを解放させるかのように。しかし、二人の女の激しい攻撃を受けた Edward に生きる力は残っていない。

インドへと旅立った Nancy から電報が届く。‘Safe Brindisi. Having rattling good time. Nancy.’ 楽しげな、何の屈託もない電文を読んだ後、Edward はペンナイフで喉を掻き切って果てる。Nancy を永久に失い、Leonora と永久に対立した Edward には生きてゆく場所がなかった。

Edward の死を知った Nancy は完全に狂ってしまう。結局は Dowell が彼女を引き取り、買い受けた Branshaw Teleragh で面倒を看ることになった。狂った Nancy が語る言葉は二つだけである。‘I believe in Omnipotent Deity’ と ‘shuttlecocks.’ 残忍な言葉で愛する者を苦しめた報いであろうか。Nancy に残されたたった二つの言葉はあまりにも悲しい。‘shuttlecock’ のように Leonora と Edward との間を往復させられた自分の生き方を呪っているのか。人間は誰も ‘shuttlecock’ のよ

(184)

うなものと訴えようとしているのか。

Leonora Ashburnham は生き残る。狂うこともない。“perfectly normal, virtuous and slightly deceitful husband” (Rodney Bayham) を得て、近い将来、母親になるという。Edward を守る為の戦い、Edward をめぐる戦い、Edward 自身との戦い、全てが終わったのだ。沈黙によって、あるいは、ほとぼしる言葉によって自らを武装する必要もないのだ。Leonora は静かに休息している。

Rebecca West は “All three (Edward, Florence and Nancy) are lost: and perhaps Leonora, robbed of her fineness, is most lost of all.”⁽²⁴⁾ と語っている。はたしてそうであろうか。さまざまな愛の戦いを戦ってきた Leonora に敗者ではなく勝者の姿を見ることもできるのではないか。

Society must go on, I suppose, and society can only exist if the normal, if the virtuous, and the slightly deceitful flourish, and if the passionate, the headstrong, and the too-truthful are condemned to suicide and to madness.⁽²⁵⁾

Leonora は “passionate” で “headstrong” で “too-truthful” ではなかったのか。さまざまな戦いを経て彼女は “normal” で “virtuous” で “slightly deceitful” な世界への逃避に成功したのではなかったのか。Edward も Nancy も Florence も society への逃避が出来なかった。Leonora ほど激しく戦ってはいなかったのだから。

この小説を出版した後、Ford Madox Ford は前線へと戦いに赴く。第一次世界大戦という、とてつもなく巨大な狂気と死を Ford は如何に生き抜いたのか。その戦いは、どのような形で作品に描かれていくのか。Leonora Ashburnham にかわって戦う女は誰なのか。

今後の課題として探究し続けてゆきたい。

註

- (1) Stella Ford (Stella Bowen) への dedicatory letter より。Stella Bowen と Ford は1918年に知り合い1927年まで共に暮らした。
Ford Madox Ford, *The Good Soldier* (Great Britain: Penguin Books, 1984), p. 6. 尚, 本論における小説作品からの引用は全てこのテキストに拠るものとする。
- (2) 1919年に, Ford Madox Hueffer は Ford Madox Ford へと改名した。
Ford Madox Ford の人生については Ford 自身による, *Return to Yesterday* (London: Gollancz, 1931; New York: Horace Liveright, 1932, 1972), *It was the Nightingale* (Philadelphia and London: J. B. Lippincott, 1933; London: Heinemann, 1934; New York: Hippocrene Books, 1972; New York: Ecco Press, 1984), *Provence* (Philadelphia and London: J. B. Lippincott, 1935, London: Allen and Unwin, 1938) と伝記 Arthur Mizener, *The Saddest Story* (New York and Cleveland: The World Publishing Company) を参照した。
- (3) *Ford Madox Brown*. (London: Longmans, Green, 1896.)
- (4) *Joseph Conrad: A Personal Remembrance*. (London: Duckworth, 1924.) 参照。
- (5) Sondra Stang, *Ford Madox Ford* (New York: Frederich Ungar Publishing Co, 1977), p. 22.
- (6) Richard Aldington, *Life for Life's sake* (New York: Viking, 1941), p. 158.
- (7) Hugh Kenner, *A Sinking Island* (New York: Alfred A. Knopf, 1988) の “The Lawence Business” を参照。
Ford の文人として力量について Ezra Pound は語っている。“I would rather talk about poetry with Ford Madox Hueffer than with any man in London.” (*The Letters of Ezra Pound 1907-1941*, ed. D. D. Page, New York: Harcourt, Brace, 1950), pp. 388-389.
“Mr. Hueffer is the best critic in England, one might say the only critic of any importance.” (“Status Rerum,” *Poetry, A Magazine of Verse*, I, 125-126 January, 1913.)
- (8) Ford の作品を伝記的事実との関わり合いを通して論じているものとしては, Arthur Mizener, *The Saddest Story* 及び Thomas C. Moser, *The Life in the Fiction of Ford Madox Ford* (Princeton: Princeton University Press, 1980) が挙げられる。
The Good Soldier を喜劇としてとらえている研究者としては Mark Scho-

rer を挙げられる。cf. “An Interpretation,” in *The Good Soldier*, v-xv. (New York: Knopf, 1951.) 悲劇と解釈している代表的研究者は John Meixner であろう。cf. *Ford Madox Ford's Novels: A Critical Study*. (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1962)

Sondra Stang は心理小説としての面白さを作品に見い出している。cf. *Ford Madox Ford*

- (9) *The Good Soldier*, p. 11.
- (10) *Ibid.*, pp. 130-131.
- (11) *Ibid.*, p. 136.
- (12) *Ibid.*, p. 137.
- (13) *Ibid.*, p. 145.
- (14) *Ibid.*, p. 166.
- (15) *Ibid.*, pp. 162-163.
- (16) *Ibid.*, p. 169.
- (17) *Ibid.*, p. 187.
- (18) *Ibid.*, p. 203.
- (19) *Ibid.*, pp. 189-190.
- (20) *Ibid.*, p. 215.
- (21) *Ibid.*, p. 217.
- (22) *Ibid.*, p. 118.
- (23) *Ibid.*, p. 214.
- (24) *Ford Madox Ford, The Critical Heritage* edited by Frank MacShane (London and Boston: Routledge and Kegan Paul, 1972) p. 46.
- (25) *The Good Soldier*, p. 227.